

〈シンポジウム報告〉

2015 年度 龍谷大学国際文化学研究科 FD 研究会 「冷戦の記憶－オフィシャルな記憶の表象と対抗的記憶」

2015 年 11 月 4 日（水） 15:00 ～ 18:00

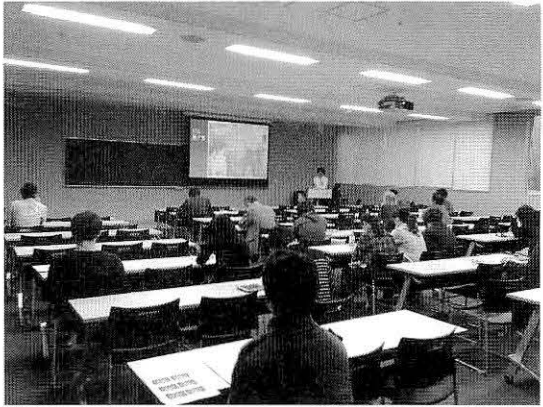
プログラム	15:00 ～ 15:10
はじめに (司会)	15:10 ～ 15:40
斎藤 文彦（龍谷大学国際文化学研究科）	
報告 1	15:40 ～ 16:10
平山 陽洋（名古屋外国語大学外国語学部）	
「ベトナムにおける冷戦と戦争の記憶」	
報告 2	16:10 ～ 16:40
土屋 貴寛（龍谷大学国際文化学研究科・修士課程）	
「『雪解け』期のアメリカ映画における冷戦と核の表象」	
報告 3	16:40 ～ 16:50
松居 竜五（龍谷大学国際文化学研究科）	
「冷戦と現代オペラ」	
休憩	16:50 ～ 17:00
コメント	17:00 ～ 17:10
瀧口 順也（龍谷大学国際文化学研究科）	
コメント	17:10 ～ 17:50
杉本・パウエンス ジェシカ（龍谷大学国際文化学研究科）	
質疑応答 & 全体討論	17:50 ～ 18:00
総括	

斎藤 文彦（龍谷大学国際文化学研究科）

ベトナム戦争終結から 40 年が経ち、また冷戦が終焉してから 25 年近くが経った。冷戦と呼ばれた時代や、その時代を特徴づける種々の出来事が歴史研究の対象となり始め、「新しい冷戦研究」が盛んに進められている。他方で、冷戦期の同時代的記憶が薄れゆく今日、これらの出来事が歴史的記憶／集合的記憶として世界のさまざまな地域でどのように構築されているのかについての関心も高まっている。

集合的記憶であっても個人的記憶であっても、過去の記憶は固定化されたものではなく常に変化し続けるものだが、ある時点において歴史化・社会化された記憶が非常に強い影響力をもち、特定の国・地域で生活する人びとのアイデンティティを拘束する（し続ける）事例も少なくない。

今回のシンポジウムは、現在にも一定の拘束力を有する冷戦時代の記憶の表象を対象とし、その記憶の表象の形態と手段を検討する



ことを趣旨として開催された。記憶の構築される空間／メディア／言説を考察することを通して、歴史と記憶の複雑な関わりに照射することを試みた。また、歴史の記憶は独占的に権力者によってのみ生成されるものでもなく、一般の人びとや芸術家らによってオフィシャルな記憶に対抗する記憶（オルナタティヴ・メモリー／カウンター・メモリー）が提起されることも少なくない。これらの背景をふまえて、今回のシンポジウムは、冷戦の時代に「熱戦」を経験したベトナムにおける公的な記憶の表象とその形式（平山）、近年になり盛んに「読み直し」が行われている冷戦期のアメリカ映画における核兵器表象（土屋）、オペラの中に描かれる冷戦（松居）の三報告から構成された。

〔シンポジウムの様子－平山氏の報告〕

平山報告は、ベトナムにおいて「公式な記憶」がどのように提示されているのかを、視覚的表象物から読み取ろうとするものだった。特に注目するのは、革命や戦争における殉死者を悼む目的で建立された「烈士追悼碑」、博物館で示される歴史の記憶、1980年代中盤以降に盛んに建立された人物記念碑の三形態であった。興味深かったのは、烈士追悼碑が比較的国民に受け入れられているのに対し、人物記念碑像が不況を買い批判に曝されているという、記憶のメッセージではなく、その形態に対する反応の異なりであった。フィールドワークや文献資料の考察から、「公的」な記憶が必ずしもそのまま国民的記憶として定着しているのではなく、さまざまな読み替えや意味付けを経て受容され消費されている様相を明らかにした。

土屋報告は、「新しい冷戦研究」の視座を「文化における冷戦」の枠組みに導入することで、これまでの冷戦期の文化・芸術作品へ問い直しを迫るものであった。特にスタンリー・キューブリックが監督し、1964年に公開された映画 *Dr. Strangelove* を取り上げ、この映画がアメリカ内部から核兵器や冷戦構造そのものへの批判を提起する嚆矢となった作品であると指摘した。既存の冷戦期の芸術作品の研究では、米ソ間の政治・イデオロギー対立がそのまま反映され、一方が他者をどのように表象し、またそれぞれのイデオロギーを正当化するような表象を提示したかという枠組みで語られてきたが、そのような二項対立的な図式では把握しきれない冷戦期の芸術文化の多様性を描き出した。

松居報告は、一般的には「19世紀的」な芸術形態として理解されるオペラが、20世紀の国際政治を的確に表象する芸術形態として作用しているのではないかと論じた。特にドミトリ・ショスタコーヴィチの手による『オランゴ』（1932年初演）や、ジョン・アダムスによる『中国のニクソン』（1987年初演）などは、その聴衆を限定するからこそカウンター・ナラティヴ構築の可能性を秘めていたのではないかという知的好奇心を刺激する報告であった。

これらの報告を受けて、瀧口と杉本がコメントと質問を提起し、討論が行われた。とくに平山報告に対するコメントが数多く示された。例えば、ベトナムにおいて代表的な記憶表象の形態とされる烈士追悼碑や人物像記念碑は、ヨーロッパなどの他地域にも見られる媒体であるが、それらのなかにベトナム特有の形式／意味づけ／様式が発見できるのか、インドシナ戦争とベトナム戦争の記憶の表象形態に大きな違いが発見できるのかなど、報告を補完しながらも、他地域との比較の可能性を示唆する興味深い質疑応答が展開された。それらに引き続く全体討論においてもいくつかの質問が提起され、予定の時間に収めるのが困難なほどに活発な意見交換と議論が行われた。

シンポジウム全体を通じて、異なる時代や地域を扱う三報告であったが、問題意識を共有している部分も多く、参加者の知的好奇心を喚起する有意義なシンポジウムとなった。

＜文責： 瀧口 順也＞